
ゲームストーリー

zira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームストーリー

【Nコード】

N6147N

【作者名】

z i r a

【あらすじ】

ゲーマーな普通の男子が異世界に強制的にとばされた。
何が待ち受けているのか！？

オープニング・勧誘（前書き）

さ・・・2個目の小説です。

1個目も終わってないのに大丈夫かな？

オープニング・勧誘

オープニング「勧誘」

ゲーム。人によっては暇つぶしや息抜き程度でプレイしている人も
いる。

だが、現代の子供達は遊びだが真剣にやる。純粹に楽しんでプレイ
をする。

「エンディング長いな。」

コントローラーを置いて、空になったコップに飲み物を汲んでい
る。

白井^{シロイ} 獅^{シロ}、中学三年生。15歳。

「ちゃんとみるよ。」

清水^{シヅミ} 誠^{マコト}、白井と同学年。

二人とも受験に前期募集で第一希望に受かったので、久しく一緒
にゲームをしていた。

「このゲーム値段の割にはつまんなかったな。」

色々なゲームをやってきた白井には、どの値段ではどのくらい楽
しさがあるか基準みたいのがわかってしまっている。

「ま、ここからやりこめるゲームだろ。」

「ならいいけどな。」

昔から二人で金を出し合って一緒にゲームを攻略していていた。
この二人はそれが日常だったためかなりのゲーマーだと気づいてい
ないだろう。

「つーか本当に長い。」

ついに白井は寝転がった。

スタッフロールが流れているが、地味に長い。

「まあ長い分、製作者が多いんだろ？」

エンディングの倒してきた魔物の絵をずっと清水は見ている。

「だからたけえのか。」

「多分そうだと思うけど。」

制作者が多いと制作費がかかる。そして値段が高くなる。

「ま、このゲームも大体終わるだろうし、次何買う？」

白井は起き上がり計画を練り始めた。

「有名ゲームは大体やったんじゃないか？」

「隠れゲーとかかあ？」

全然有名じゃないゲーム会社のおもしろいゲームなどのこと。

「んー・・・まあ明日適当に考えるか。」

「おけい。」

エンディングも終わり清水はそのまま帰っていった。

「ゲーム・・・なんかすげえクオリティの高いやつ・・・うーん。」

ずっと考えてみたがなかなかみつからなかった。

そんなことを考えている夜信じられないことがおきた。

なぜか少女がいた。

俺のベットの横にいた。

髪の毛が地面についているほどの長さで白い。

「白じゃない銀。」

こちらをふいつと向いて言われた。

それよりも・・・

「俺の考えてることが何故わかった!？」

「神だから。」

あまりにも早すぎる返答とその返答の内容に俺は止まった。

「そんなに驚くことはないんじゃない？」

その少女の声にやっと自分は動き出した。

「いやいやまで。そんないきなり言われても・・・早くお家に帰りたいなさい?」

俺の声に反応したように少女は指を空で描いた。

「てい。」

少女が声を放つと俺がベットから50センチほど上に浮かんで・

「浮かんでる!？」

そして俺の勉強机からはさみがとんできた。

はさみはきれいに俺の横を通り壁にささった。

「わかった!認めるからやめて!」

なんてエキサイティングな夢なんだ・・・。

「ゴン!」

俺の頭に本がクリーンヒット。

浮かびながらもがいた。

「いつてえ・・・。」

本が当たると自分の体はベットに戻った。

「次首ね?」

笑顔で答える自称神。

「いやだ!俺は寝るんだ!」

こんな恐怖感がある夢なんて嫌だ。

「現実逃避するなっ。」

神は俺のベッドに飛び乗ってきた。

そしてどこからともなく10tハンマーを取り出す。

「寝たらたたき起こしてあげるから♪」

「はい。寝ませんすみません。」

初めてみたよ・・・10tハンマー。

「それで神は自分に何用です?」

冷静に落ち着きは取り戻せてないが、がんばった。

「ゲームをやってほしいの。」

「は?」

なんか自分のよく知ってる単語がでて落ち着きを取り戻した。

「なんのゲーム?」

「神ゲー。」

俺の思考回路は完全にショートした。

「えー・・・と？」

「私たち・・・神たちが創ったゲームの世界。そこに行ってほしいの。」

こいつどうかしてるだろ？ここに警察呼んでいいですか？

「いや事実だし。警察なんて意味ないよ？」

思考回路はショートしてなかったらしい。思考回路がバレた。

「っーかそんなの作れんのかよ!？」

「神だから。」

うわ。

っーか俺しゃべなくても伝わるのか。

「伝わるよ。」

「そうかい。」

のぞき見変態野郎か。悪趣味だな。

「好きでみてるわけじゃないよ。こんなドロッドロなやつ見たくないよ。」

まて俺の思考回路はそんなドロッドロしてんのかよ？

「うん。ダークマター（暗黒物質）ぐらいドロッドロしてる。」

も・・・もういいや。それでなんでそんなところに俺がいかねやならないのさ？

「まあ・・・それは・・・えーと・・・諸事情により。」

ひょいとそっぽを向く。

「待て。そこ詳しく説明してくれ。」

「それで、あなた達にもう行ってほしいんだけど・・・道具とかもあつちで揃えてね。」

こいつ・・・話そらした・・・ん？

あなたたち？

「そう。今日一緒にいた・・・清水って子もね。」

あー・・・あいつもなのか。そりゃ大変ですな。

「ま、なにか質問はある？」

えーとですね・・・ゲームオーバーになるとなんかありますか？

「アイテム落とすとか金を落とすとか・・・なんて嘘。命を落とすわ。」

あ。すみません自分いきません。

「ダメ。」

そしてまた俺は宙に浮いた。

待て。聞け。いきませんといったのですが？

「あなたたちに拒否権はないわ。」

そういつて神はなんか呪文を唱え始めた。子声でよく聞こえなかったが。

すべて言い終わると部屋の中心に次元空間・・・旅のと。ら・・・ワープゾ。ンの的なものが出てきた。

「んじゃ。よろしく。」

「うおお！？すいこまれる！？」

体が浮かんでいるのにすいこまれていた。

俺は間一髪でベッドのはじの塀てきなものにつかんだ。

だが・・・

「パキ」

お・・・オワタ。

「ウアアアアア！？」

青狸のタイムマ。ンのような空間が広がっていく。

俺の生活はどこに消えていくのだろう。

そして光が見えた。

ぽすつと落ちた場所は・・・

「ん？」

屋根の上。

1章 1・意味のない逃走

1章 1・意味のない逃走

「うええ!？」

普通に怖い。

ゲームとかならこういう屋根の上にのぼったりするけど怖いです。
つか自分が乗っている屋根の上って・・・。

「城？」

「ハロハロどうですかそっちの気分は？」

俺の脳内で何かが喋っている・・・って・・・。

お前か！

「神様に向かつてお前はないんじゃない？」

お前のその自分で神様って言うのは痛い子にしか感じないよ。

「うるさいなあ。私は本物だから仕方ないでしょ。」

まあ・・・どうでもいいが・・・俺を帰してくれ。

「そろそろあきらめなよ。」

く・・・それはそうだが・・・。

「で、そっちの気分はどう？」

ん・・・別に気分は悪くないけど？それどころか体が軽い？

「あー。それはそっちの世界の重力とかいろいろとあるからステータス的にはあがってると思うよ。」

あーそういう補正はついてるのね。

「一応ね。」

まあ、どうでもいいけど俺は今からどうすればいいの？

「知らない。」

は!？

「あ、ゴメンこっち用事できちゃった。またあとで。」

ちよ!?!?待てよ!?!?

なんか脳内の神との電波が切れたような気がする。

くそ。どうすれば・・・？

「あなた、そこで何をしてるの!？」

ん？イベントかな？

「わ、悪い者ではありません!？」

なぜハテナをつけたのだろう。

ゆっくりと柱をつたって降りる。

そこには格好からして姫様っぽい人があらわれた。

「あなた・・・変な格好・・・ふふっ。」

自分からしてみればあなたのほうがすごいですけどね。っていうか・・・。

ああ・・・俺寝巻き姿なのか。心底泣けた。自分のほうが駄目でしたね。はい。

「えっと・・・？」

「いいわ。少し城の中にはいつてきなさい。」

「はい？」

いきなりつかまった。

つーかなんでこの人日本語話してるんだ？

「ちょ!？自分怪しい者じゃないんですが!？」

「格好からして怪しい。」

「そ・・・そうですけど。」

ここは普通に負けた。

「あなたからは何が異界からの匂いがする。あなた名前は？」

えっとこの世界の人は自分が異界からきたってわかるの？

「え・・・と猫です。」

「リヨウね。リヨウ。私の隊に入る気ない? いや入れる。」

「はい?」

なんか展開が早すぎて目が回りそうです。まあ今連れ去られてて城の中グルグルしてるけど。

「隊?」

「あなた本当に異界からきたのね……。隊っていうのは普通に護衛よ。親衛隊みたいなものね。」

「ごめんなさい。ちゅうぼうには全くわからないけど。つか。なぜに自分が？」

「私が決めたら決まるものよ。」

「嫌だ。さらば。」

この姫様のな人から逃げる。

来た道は全くわからないからひよろひよろつと逃げる。

「城内にいるすべての者に告ぐ！黒髪の者が城内を逃走中！ただちに捕らえよ！これは隊長からの命令だ！」

アナウンスが響きわたる。

「なんで城にアナウンス機能あるんだよ！？つか伝わるのはや！」
思わず声を出してしまった。いやツツコミどころ満載だから仕方ない。

「今の声だ！こっちから聞こえたぞ！」
やべ。

当たり前に声のした方の逆側に逃げる。

だが、あちらのほうが地の利は絶対的にある。

「見つけたぞ！」

ほーら、見つかった。

「こいつか！」

あ、ハサマレタ。

うわ……。本当に思ったとたんにつかまりそうだ。

なぜにみなさん腰の剣に手をおいてるんですか？

正直怖いです。スーパীগクブルタイムです。

「お前は何者だ！」

うん。日本人です。……よしまだ冗談は考えられるぞ。

つつても言葉によつては抜刀されたりするのかと。つか色々といひどい目にあうのか？

「そうやって脅すな！」

べしつとうしろから叩かれた人がいた。

「た、隊長！」

うしろからやってきたのはさっきの姫様だ。

姫じゃなくて隊長だったのか。女の人でも隊長になれるのか。

「隊長つていうな。お前に隊は任せているだろ？ドラウン。」

「申し訳ございません。姫様。」

ん？姫様なの？

頭がクラクラしてきた。

「この私から逃げるとは予想外だった。もっと入れてみたくなった。」

「

「あの・・・姫？」

「ああ。一応な。アゼルと呼んでくれ。」

なんつー友達感覚。

「そんな！姫様！」

よこからちっさい歩兵みたいな人が話にはいつてきた。

まあそりやそうだわな。

「いいじゃないか。お前らも呼んでいいぞ？」

さっきの喋り方と全然違う。なんか男勝りがあるつつーか。

つーかなに？俺は入ること決定なの？

「まあまずは話を聞こうか。ドラウン。中央の部屋にお前も来い。」

「了解した。」

よく訳がわからなくなってきた。

そのまま自分は何も出来ずに連れ去られた。

そりやあみなさん構えを解かないんだもの。

大きな扉を通り、普通に大きい部屋に3人でいます。

「色々と聞きたいことがある。」

「そりやそうでございましょうね。」

姫は姫だが格好以外は別に姫と思う特徴はない。赤い髪でショ-

トつてところからして。すんごく可愛いが。

姫「金色の髪で長いイメージがある。」

「お前はどこからきたのだ？」

「何も隠さずに言つと地球というところから。」

「チキユウ？」

ああ地球でも伝わらなかった。

「自分もわからない。」

ドラウンさんもわからないそう。

「まあ・・・遠い世界です。」

「なぜきたのだ？」

「それは自分にもわからないので。」

「ほう・・・。」

あの神が何も言わない限り何もないしなあ。

「なら、やはりはいるしかないだろ？」

「なにに？」

「私の隊だ。」

あ、その話ですか。

「その・・・なんで自分をそんなに入れたがるんです？」

「気分だ。」

「姫・・・てきとうすぎじゃないです？」

この人もさっきのときの隊の時と話し方がちがう。まあ普通にまじめそうな人だな。

仕事とプライベートってやつですか？

「まあ。もう隊には契約しといたから安心しなさい。」

「強制ですか！？」

なんか面倒くさそうなんだけどなあ。

「別にリヨウにデメリットはないと思うが？」

あれドラウンさんも自分の名前しってるのね。

「え・・・とドラウンさん」

「ドラウンでいい。そんな堅苦しいのも嫌だろ？」

うわ。この人いいやつだ。なんて重苦しい雰囲気をつつとばしてくれるのだろう。

「んではドラウン。ドラウンの仕事って・・・いうのかな？隊って
どういうことしてるん？」

「まあいつもは何もしていないといっても過言じゃないな。」

「へ？」

「サボリですか？」

「何もしてないっていうのはちがうか。戦闘の練習。魔法の修行。
道具の調達。色々やっているがみんな遊び感覚だ。俺たちも鎧み
たいのを着込んでないだろ？」

魔法か・・・俺も撃てるようになるのかな？道具の調達ってあ
の有名なモンスター狩るゲーム的なやつですか？本当にゲームの世
界だ。

「それで金もらえるん！？」

「それはでるぞ？さっきのようにリヨウを探したりもするしな。」

「う・・・。」

まあそんなことだけかあ。ならいいか。

「まあ契約はしたことだ。みんなも迎えてくれるだろう。」

姫は立った。

「これからよろしくな？」

手をさしのべられた。自分こっいつの苦手なのだが。

「よろしくアゼル。」

「ここだ。」

「おー！」

感嘆の声をもらした。

自分の部屋をもらった。しかも日本の部屋よりも大きい。

「今日はもう暗い。寝ておけ。」

「ありがとドラウン。」

ドラウンはそのまま手を上げて去って行った。

本当いいやつだ。

「さてと。」

ベッドにもぐりこんで寝ることにした。

変な神のせいで自分は寝れていないんだ。

「呼んだ？」

「またか！？呼んでねえ！」

「うるさいよ。もう完全に夜だよ。」

お前がいきなり現れるからだ。馬鹿やろう。もうこっちは眠すぎるんだ馬鹿やろう。もひとつおまけに馬鹿やろう。

「ひ・・・ひどいね・・・ま、よく隊になんか入れたね。飛んだところがよくったのかな？」

いや俺のリアルラックのおかげ。

「まあ・・・そういうことにしておいてあげるよ。」

それで？次は何のようだよ？

「君をここに連れてきた理由だよ。」

それは先にいうもんじゃないんですか？ねー？

「さてさて、ま。普通にゲームのように進めていけばわかることだからいいんだけどさ。」

うん。嘘だよな？

「まあ。これストーリーにはなっていないからね。仕方ないね。」
で、どうしろと？

「まあ。まずそっちの世界になれてもらってからの方がいいかな？って思った。」

さっきまでの前振りどこいった！？

「今。」

もう・・・寝る。

1章 2・武器

ゲームストーリー

1章 2・武器

起きると天井の様子がかった。

そういえば異世界だった。

「トントン」

「リヨウ！起きてるか！？」

アゼルの声だった。もう姫のイメージというよりも同級生の女の子みたいなイメージになってきてる。

「あ。起きて・・・」

「バン！」

返事をする暇もなくドアは大きな音を立てて開けられた。

あんれ〜？鍵閉めてなかったっけ？

「今・・・どうやって開けた？」

なんかハテナの顔をされたが何か思い出したように表情が変わった。

「そつえば知らないのか。開錠魔法で私ならこんな鍵無いも同然だが？」

それ・・・犯罪にならないの？

「そ・・・そうですか。んで、何の用で？」

「ああ。そうだった。朝食の用意ができてから広間にきてくれ。」
朝食・・・。

こっちの食べ物ちゃんとしてるやつかなあ・・・？カブトムシの幼虫みたいのが焼いてるのがあったらまじ泣くよ？もし、それが味良かったとしても泣くよ？

「広間ってどこさ？」

昨日、この部屋にくる途中ドラウンが城の事を話してくれたが、

すみません。眠かったんです。覚えてないです。

「つー……待っててあげるから早く着替え……」

「着替えもってないです。」

自分はシマシマの寝巻きを着たままいった。

広間に入ると自分への注目がすごかった。

これは隣のアゼルだね？わかってます。

「あいつか。」

「本当に黒髪だね……。」

「うわー……怖そう……。」

「ねー。」

「あいつ……黒魔法の達人だってよ。」

「そいつは……やれるな。」

「あとで習おうかな。」

あのー……みんな聞こえるように言ってるんですか？心がズツタズタに切り刻まれていますよ。そりゃあ「こうかはばつぐんだ！」で1.5倍ダメージですよ。

もう視線を食べ物に移そう？きついから。泣いちゃうよ？その大好物な獲物を見る目でみないで。

つーか黒魔法ってなにさ？暗黒魔法ですか？グラ。デですか？

そういえば黒髪で思い出したけど、本当に黒髪の人誰もいないんだね。昨日のアナウンスで黒髪の者って流れた時はビックリしたけど……これは目立つね。

このきつい視線の中から、ドラウンが遠くから手を振って迎えてくれた。

「おお。眠れたか？」

「ぐっすりと。」

フカフカのベッドだった。なんて寝やすいことか。どっかの神さえないなければもっと寝れたはずなのに。

目の前にあるのはカブトムシの幼虫じゃなかった。心底ホツとした。木の実や果物で色とりどりの美味しそうなものばかりだった。名前も知らないし、形も地球にないものばかりだったが・・・美味い。素晴らしいほど。

「これ美味いな。」

「ほう。トリム好きとは珍しいな。」

このトリムってやつは日本の蜜柑みたいだった。

ていうか蜜柑が好きなの珍しいってことは、味の感覚とかもちがうのかな？

そのトリムという果物を無心にほおばっていると・・・。

「ドラウン。リヨウの服と一緒に選んできてくれ。ついでに隊の用品もよろしく。」

「わかりました。」

隊の用品ってなんだろうなあー！

まあ。この服が変わってくれるならどうでもいいか。

「さてと。なら行くか。」

口にはお張ったトリムをゴックンと飲み込み。

「わかった。」

朝食を食べ終わり、部屋で待っているとされたのでどうにかして部屋にもど・・・

はい。すみません。もどけません。

ドラウン、ゴメンな。眠いせいじゃなかった。自分が方向音痴だった。

色々な人の視線を気にしながらウロウロしてどうにかして記憶をたどった。

やっとなんとなくわかってきた曲がり角で・・・

「ドン！」

「いったあゝ・・・。」

なんかベタな展開すぎる。ここで自分は手を差し伸べたほうがイイのかな？

「えっと・・・すみません。」

「ベ・・・別に痛くなんてないんだから！」

「うわぁ・・・ツンデレだったぁ。初めてみた。」

「あ・・・く・・・黒髪の人・・・何かお困りです？」

「あれ？いい人だった。」

「いや、えっと。自分の部屋の位置がわからなくて。」

「えっと、ここまっすぐ突き当たりまで行って、左いったらすぐです。」

笑顔で答えてくれた。やっぱり普通ないい人だ。

「あ、ありがとうございます。」

そう言くと、女の子は顔を赤くして。

「ベ・・・別にお礼なんて言われたってうれしくないんだから！」

前言撤回。ツンデレでした。

まあ、なににせよ道がわかって、部屋に戻れた。

その数分後ドラウンが来た。

「うし。行くか。」

「おう。」

もう少し遅れたら完全に終わってた。

城の外に出るのは初めてだった。昨日は夜だったからよく見てなかった。つーか見えなかった。

というよりも、ドラウンの隣の男の子・・・誰？

「ああ。こいつはカークだ。魔法の扱いは長けているからこいつに聞け。」

「はぁ。よろしくです。」

「いえいえ。こちらこそよろしくです。黒髪さん。」

俺の名前はいつから黒髪さんになったの？

「で・・・魔法ってどうやって撃つの？」

「えっと・・・そこからです。魔法は・・・イメージです。火だつたら頭の中で火をイメージして、体の中のマナを放出する感じがす。」

全然わかんない。

「そのマナってやつはPPみたいなやつ？」

「ピーピー？」

放送禁止用語みたいになっちゃった。

「そのピーピーっていうのはわかりませんがマナは魔力です。マナは体の力の源なので、使いすぎると倒れたりしますよ。」

「あー・・・なんとなくわかった。」

やっぱPPっぽいやつか。

自分も撃てるようになるのかな？

「まあ。あとでリヨウのマナの流れを教えてやるから。服。選んじまえ。」

歩きながら話していたので、いつのまにか店についた。

「コレ。」

「早!!！」

「で・・・ですね。」

いや。色々とみようと思ったけど普通に目に入った旅人の服みたいなやつを即選んだ。

「本当にそれでいいのか？」

「おーけー。」

だってこれ格好よすぎる。

「まあ。それでいいか。」

「疾風つきですしね。」

・・・疾風？

なんとなく聞きそびれてしまった。

「よし。んじゃ行くか。」

ひよろつと着替えてみた。すごく動きやすい。いや寝巻きと比べ

てはだめか。

寝巻きは一応もらった袋にいれといた。

「うし。なら次は武器屋だ。リヨウ、お前のな。」

「ほう。って隣かよ!？」

服屋の隣だった。

武器ってどんなもの使えばいいのかな？

「つーか。払ってもらっちゃって大丈夫？」

自分ここの金もってないよ？

「それは、国から金でてるから大丈夫。」

「僕も最初は杖を買ってもらいましたよ。」

カークさんも買ってもらったのか。

つーか。国からでるって流石だな。

「んで、自分どんなの買えばいいの？」

「どれでも自分が好きなのを買え。」

好きなのかぁ・・・。

ドラウンが見ているのは棒の両端に剣がついているやつだ。

「なにそれ？」

ダブルセ。バーみたいな武器だった。

「これはメーネだ。」

「メーネ？」

「昔、騎馬が考え出した剣だ。騎馬はどうしても剣をもっていないほう。弱手側の攻撃に弱い。馬の首に剣があたって攻撃できないからだ。」

「それでこのメーネっていう武器で両側が攻撃できると。」

「そうだ。」

なんかかっこいいなあ。

「決まったのか？」

「いや、まだ。」

このメーネってやつ使ってみたいけどなんかかぶるとやだなあ。変なプライドを持ってしまった。

「おお。」

黒い刀身の剣を見つけた。

「これ・・・かっこいいなあ。」

「ほうバスタードソード片手半剣か。」

バスタードソードってものゲームの武器の名前っぽいね。

「これは、片手でも両手でも扱えるという武器だ。力を加えたいときは両手。速度でやるなら片手と使いわけもできて、リーチもなかなかある。」

ほえー。

「これにする！」

「なかなかいい判断だ。」

だってかっこいいんだもん。なんかかっこいいだけで判断してる。ドラウンは色々と爆弾や、投擲武器などをもっていた。

こんなもんも必要なのか。

「よし。ならいつてみるか？」

買ってもらったバスタードソードを持ってみたけど・・・やばい。手にしっくりくる。なんか使いやすいそうな気がする。

「えっと・・・どこに？」

「クエスト。」

は・・・はやくね？

1章 2・武器（後書き）

今回のネタはまあ・・・色々つつこんでみました。

ポケモンとかドラクエとか。

ダブルセイバーはPSO。

メーネっていうのは、本当にある武器なのかなあ？パンプキンシザースでアリスが使ってたけど・・・

あとバスタードソードって本当にある武器らしいね。びびった。

1章 3・クエスト

ゲームストーリー

1章 3・クエスト

「クエスト」

それは、依頼。

モンスターに怖がる人たち、食べ物が足りない人たち。武具を作るために素材がたりない人のためにやるもの。困っている人のために自分たちが動き出す。

それがクエスト。

「いやだああアアアア!!」

いや正直さっきの前置きいらなです。自分ゲームはかなりやっています。はい。

そのゲームをかなりやっているやつなのになんでクエストをやるのかって？

「おいおい。クエストをやらないと何も始まらないが?」

「ドラウン・・・俺は何を始めるっていうんだい?逆に俺の人生終わらない?」

そう。ゲームとはちがつて失敗は許されない。

「そんな死ぬほどのクエストじゃない。LV3のやつだ。安心しろ。」

なんでLV1からやらないの?いじめなの?

「それじゃあ行きますか。」

カーク君が僕をひきずります。僕はかかとをどこにかしてふんばつてるのに簡単にひきずられます。

「まあ。リヨウが自分の金を作らなきゃやっていけないしな。」

「まあ・・・それもそうだけど・・・。」

ずっと金を出してくれるわけないだろうし。自分でやっていかな
いとか。

「よし・・・わかった。いこう。」

ドラウンは安心した顔を浮かべた。

「だが、はやく鞘に剣いれるよ?」

町中で抜刀してる不審者になっていた。

「は・・・はいった。」

このバスタードソード・・・腰に鞘をつけると地面についてしま
うので背中につけたのだが全く剣がはまらない。

それどころか、買ったばかりの服をすこし切ってしまうぐらいだ
った。

「まあ、最初はそんなもんだろ。」

「しょうがないですよ。」

カーク君。君のなぐさめもいじめに聞こえてくるよ。

クエストは普通、クエスト掲示板というのがあって、そこから受
けて報酬をギルドからもらうらしい。

「つーか、クエスト内容知らないんだけど?」

クエストといっても色々あるはずだ。収集とか家の修理とかペッ
トを預かってくださいとか?

「レッドハウンドっていうモンスターを退治するってやつだ。」
「ですよー。」

「それで・・・どれくらい倒せばいいん?」

「あ。きましたよ?」

バウバウと声を張り上げながら赤狼の群れがき・・・

「あれ?」

「あれ。」

「です。」

会話短くてみんな余裕そうな顔してるけどさ・・・

あの数・・・相手するん？

「ざっとみて200ぐらいですね。」

「だな。」

「なんでそんなクールぶってんの!？」

正直あれに勝てる気しません。つか無理です。

「いくぞ！」

「はいっ！」

「・・・はい。」

ドラウンの体が一気に飛んだ。

その体の大きさでそのジャンプ力はすごいと思う。

背中に背負ってる長い袋からバサツと開き双対の剣を出した。

「だああああ!!！」

低い声が空気を伝って聞こえてくる。例えると太鼓の音みたいな感じ。

ドラウンはメーネを投げやりのように構え上空からレッドハウンドめがけて投げた。

メーネは隕石のように燃え上がり地面に突き刺さった。そこから地割れがおこり、一気にハウンドは赤い光になった。

「かつけー・・・。」

「流星の言葉が一番似合ってますよね。」

確かにそう思う。

「ていうか、なんで赤い光になったん？」

「それは死んだからですよ。」

「へ？」

当たり前の顔されてびびった自分をどうしてくれる。

ここってゲームの世界だけどそういう機能ついてるの？

あの年齢制限あるゲームの魔物の切ったときに血を出さないようにして全年齢対象にするっていうゲームメーカーさんの策略なの？
ゲームメーカー・・・神だったね。

ていうか血の話じゃなくて・・・なんかこんがらがってきた。

「えっと？黒髪さん？」

「え・・・あ。生きてます。」

うん死んでないことはわかるよね。ごめん。

「あの赤い光は魂です。」

「ああ。なーる。」

だけど、素材とかそぎとらないの？モン。ンみたいに。

その心配をした瞬間になんとなくわかった。赤い魂からぽこつと何か落ちてきた。

「あんな感じにアイテムが落ちるんですよ。あれを売ったり、素材にするんですよ。」

「へええ。」

テイ。ズとかド。クエみたいに勝手にドロップしてくれるのか。なんて親切設計。

「あういうのって、レアアイテムとかあるの？」

「ありますよ。レッドハウンドだと尻尾ですね。1000分の1です。」

なんて心折設計。

多分、尻尾をそのまま切っても意味ないんだろうなあ。魂からドロップしないと。

「さてと。自分たちもいきますか。」

「おう。」

なんかドラウンの一撃を見たら大分楽になった。

あんな一撃で一気に30ぐらい倒せるんだから。

バウバウと近づいてくるレッドハウンドにびびりもせずにつっこんだ。

背中 of 剣を取り出して一気に切る。

レッドハウンドは半分に切れて、消えた。

「・・・やった。」

手に残る感触は怖かったが、自分はモンスターを倒した。

「リヨウ！一気に片付けるぞ！」

「おう！」

突きの構えで一氣につつこんで、ハウンドたちの中心に突っ込む。中心にいったら一氣に片手でコンパスのように振り回した。あとで考えるとすげえかつこわるいな。

「準隊長！黒髪さん！準備できました！」

その声にドラウンはカーク君のところにもどった。自分ももどったほうがいいのかな？

レッドハウンドの群れの中をかけて戻った。正直耳が痛いです。バウバウうっさいです。

自分はカーク君の隣にやっとなついた。

カーク君は空に杖をかざして・・・

「氷雨！！」

空から小ささまざまの氷の雨が落ちていった。

白い煙がやっとながったときに見てみると・・・

「一掃かよ・・・」

ドロップアイテムしかなく。レッドハウンドは一匹もいなかった。

「お二人がまとめてくれたからですよ。」

自分中心でグルグル回ってただけだね。

「リヨウ。お前中々やるな。初めてにしては中々だ。」

「あれで！？」

正直あれではひどいと思ったのだが・・・。

「いや・・・まあ課題は多いな。」

「ですよー」。

1章 3・クエスト（後書き）

ごめんなさい。ねむくてひどいですw
次はちゃんと作ります。

1章 4・属性

1章 4・属性

「これが報酬かあ。」

初めてもらった報酬の袋。
中々重かった。

「4000クリか。まあそんなもんだろ。」

こっちの金の単位はクリだそうです。クリってなんかかわいいね。
つか1クリって何円ぐらいなの？

「尻尾でませんでしたけど耳が出てよかったですね。」

「耳のドロップ率っていくつぐらい？」

「100分の1です。」

はい。尻尾の確率の10分の1でしたあ。

つかカーク君。ざっとみて200匹っていったなら耳が二個でていいんでない？その確率まちがってない？

まあ。リアル運が、自分ないから仕方ないけど。

ん？ここだとリアル運じゃなくてゲーム運なのか？

「よし。なら俺はまだ用事があるんでな。先に城にもどっておいてくれ。」

「わかりました。」

「うつす。」

そう言っただラウンは町の中に消えていった。
昼飯食わなくて大丈夫？

「さて、帰りましょう。」

「わかっ・・・あ、トリムだ。」

大きな広場の端っこの方に小さな露店があった。
初めて露店ってみたなあ。ゲームではよく見るけど。

「トリム・・・30クリかあ。」

トリムが蜜柑と同じ値段と考えて・・・。

蜜柑の相場がわからない。

「あっ、「魔女っ子アホっ子」4巻でてたんですか！」

なぜか横で急にハイテンションになったカーク君。

「カーク君、表紙がもう、天然って感じの女の子だ。」

「はい。200リルちょうどだね。」

「ありがとうございます。」

「んー。日本の漫画が高くて500円ぐらいだと考えると・・・

1円＝0.4リルぐらいかな？」

「ん？でもトリムが30リルだったから75円？蜜柑ってそんなもんだっけ？」

「ごめんなさい。お母さん。ちゃんと買い物は頼まれたら行くべきでした。」

はい。城にもどってきました。

帰る途中にカーク君が買った「魔女っ子アホっ子」ってどんなやつなの？って聞いたらすごい勢いで話しはじめた。

「それですね。アホがついに電気を出せるようになったんですよ！そのときの感動といったら・・・」

ごめん。もういい。聞いた俺が馬鹿だった。

そしてカーク君は変なところでマニアだったこともわかった。

カーク君シヨタ顔で中々かわいいのに、俺の中でイメージは崩れた。

「カーク君は逆にマニアじゃなくてマニアから見られるほうの子だよ！！（力説）」

そんな何をやってもダメな眼鏡の子のお母さんの説教よりもきついところにやってきました。アゼルさん。

「カーク・・・またその話をしてるのか。」

「あ、姫様。でてたんですよ！4巻！」

カーク君は先ほどかってきた「魔女っ子アホっ子」4巻をアゼルに見せつけた。

「ほう。あとで見ようかな。」

「ま、まさかアゼルも!？」

お前もマニアか!っと口走るのはやめておこう。

「? まあいいか。リヨウ。少し調べたいことがある。来てくれ。」

「アゼルさん。私に飯をくれ。」

ちょうどよくお腹の音になった。正直あんな戦い方をしたあとのスタミナ消費はばい입니다。もうスタミナゲージなくて、ずっとゲージが赤い状態です。走れません。

「それも私の部屋で用意してやる。まずはきてくれ。」

「ええー・・・」

つか調べごとってアゼルの部屋ですんの?

自分女の子の部屋いったことないんだけど?なにするかわかんないよ?

「なぜ、にやけた?」

「にやけてない、にやけてない。」

顔にでてしまったようだ。普通の顔にどうにかして戻す。

「うう。なんか怖いな。」

「なら、いかねーよ。」

なんか悔しがった顔している。ざまあ。

「まあ、リヨウがこなくては困るんだ。きてくれ。」

ま、行かなければ飯が食えない。

「はいはい。」

仕方なく自分に行く事にした。

だが、少し気になったところがあった。

「俺、なんかされるの?」

こなくては困るというのにひっかかった。

「ギク。」

おい。こいつギクっていったぞ?

「さ・・・さあ入れ。」

「なんの実験！？なあ！？」

俺は逃げようとしたがアゼルに腕をつかまれた。

「お願い。」

こういうときに限ってなぜ女の子になる！？

ギャップが激しすぎてすげえかわいくみえる。

そりゃあ、赤い髪でショート。やばい可愛さ。

「いま、炎を放ってやってもいいんだが？このつかんでる腕に。まだ相殺の仕方は覚えてないだろう？」

いや、ごめんなさい。こいつ鬼だ。俺は幻覚を見ていた。

「せつけー・・・」

「まあ、別に簡単な調べごとだ。お前の属性をな。」

「はい？」

属性ですか？

「どやって調べるん？」

「えーとな・・・まあ、ひとまず入ってくれ。」

ドアを開くと、部屋の香りが広がってきた。

「ふああー・・・いい香り。」

これが女の子の部屋かあ。

俺の部屋と段違いだ・・・物が片付いている。

武器とか変なものを除けば普通に日本の女の子と同じような部屋じゃないか？

まあ・・・部屋の大きさはかなり違うが。俺の家のリビングの3倍ぐらいある。

「ん？ああ、この匂いはレケの花の香りだな。」

ぼつんと壁にかざってある一本の花を指した。

「あの花一本でこの部屋全体にこのいい香りが広がってんの！？」

「まあ、レケは特別だからな。後で一本やろう。」

「ありがとう。」

「で、属性を調べるんだが、ちょっとそこで座っててくれ。準備す

る。」

「はいはい。」

どんなことするのか楽しみだったが痛いのは勘弁だ。

あ、自分注射大嫌いです。中3にもなって大嫌いです。赤ちゃん注射だろうと逃げます。

そして少しするとアゼルがもどってきた。

なんかコップに入った水と筆と紙をもってきた。

「まず、筆をもつてくれ。」

筆を渡された。なに書道でも始めるんです？

「この水に筆を入れて、紙に心をこめて書いてくれ。」

「・・・？」

言われた通りに水の中に筆を入れて書いた。なぜか心と。

そうすると、なぜか透明な水で書いたのに黒色が浮かんた。

あー・・・これ知ってる。小学生の時に書写の授業で先生が水で書いて黒くなったのを覚えている。なつかしいな。

「黒・・・か。」

「ん？」

どうやらちがうらしい。

「いったら？これは属性を調べるものだ。赤だったら火、青だったら水。そんな感じなんだが・・・本当に黒魔法使いなのか？」

「いや、自分、魔法なんて使えないから。」

「・・・だが、黒とでた。闇属性だな。」

あれえ？主人公って特殊なものになりやすいとは相場が決まっていることだが、闇ってどうなの？

【さて俺の思考回路はそんなドロドロしてるのかよ？

「うん。ダークマター（暗黒物質）ぐらいドロドロしてる。」】

ああー・・・そういえば。

「まあ、初めてみた。闇か・・・。」

「つーか、これだけ？飯は？」

「ああ、忘れてた。つーかりヨウ。お前黒だぞ！？何も思わないのか！？」

「うん。」

だつてこつちのことよく知らないもの。

言われたつてわかんないもの、人間だもの。

「まあ・・・それはそうだな。」

そういつてアゼルは部屋の外にあつた大きな皿をもつてきた。そう。果物たつぷりの。

「おお、トリムあんじゃん。」

「頼んでおいたからな。朝好きつて言つてたから。」

頼んであつたから部屋の外にあつたのか。

パクパクとほうばる。

なんという果物の美味さ。

「私もひとついたただくな。」

アゼルはひよいと一つ皿から黄色いりんごみたいのをとつた。しゃくしゃくと小さな手で食べてるのを見るとすごく和む。

やっぱ女の子なんだな。

「さてと、その閻属性魔法をみてみたいからな。外の広場にこい。こんな男勝りな喋り方しなければもつと女の子だと思ふのにな。つか。」

「自分魔法うてないつていったじゃん？」

まず、自分にマナがあるのかもわからない。

「それは、カームが教えてくれるはずだ。いくぞ。」

面倒だなあ・・・。朝はクエスト昼は魔法か。でも魔法撃てるようになるなら・・・いいか。

さあ。やってきました。

「あ、きましたね。」

広場にはカーク君がもう待っていた。

なんかほかにもう一人いる。女の子だ。

「えっと・・・だれ？彼女？」

「ちやうです。私、ルールウというです。よろしくです。」

うわあ。わかりやすいキャラだあ。

ツインテールの緑の髪だ。

「みんな、隊の仕事はしないのね。」

「することは、あまりないからな。」

隣のアゼルがいった。

それはそれでどうなの？あんたの隊でしょ？

「まあ、それはいいとして。」

いやよくないと思うけど。

「カーク、マナの流れやってやれ。」

そういえばマナの流れって、あれかな？どっかの忍者のチャ。ラ

みたいなやつ？

「はい。」

カーク君は俺の肩に手を置いた。

「・・・？」

なにしてるんだろう。

「いま、体内にあるマナを感じられるようにしてます。」

「はい？」

い・・・意味がわかんないです。

「んじゃあ、いきますよ。」

「へ？」

なんかモゾつとするものが体全体現れた。

「なんか、くすぐつたい。」

「えっと、そのくすぐつたいのを腕に集中させてください。」

「無理。」

どうしろっつーのさ？力をこめればいいいの？

「て、いいながら出来てるじゃないですか。」

「へ？これでいいの？」

力こめただけけど。

「そしたらそれを手の平にこめて、今回は闇をイメージしてください。」

「んー……。」

闇かぁ。やっぱり金色の髪の主人公のライバルの闇の第一の術でいこうかな。

「レイス！」

自分の想像してたより大きくなった。ギ。ノ・レイスぐらい。

地面が隕石の衝突したときみたいになった。

「地面が……。闇にのまれた……。」

「闇ってこれですか……。」

「すごいです。」

「これ、やばくない？」

自分でもこの力は危ないような気がした。

スーパージョーカータイム入りました。

1章 4・属性（後書き）

途中のやつは ブラゴですねー 最初のほうの説教はのびたのお母さんですw

あ いまさらですけど、アゼルはクルくるのアゼルのまんまです
性格はちがいますけどw

1章 5・雑談

1章 5・雑談

「はあ。」

なんかすごく色々と疲れた。

色々。（大事な事なので二回いいました。）

「まあ、あんなすごい闇を撃ったら疲れますよ。」

「それだけじゃないんだよ、なんか・・・色々。」

（三回目。）

なんか、きついんです。自分がこんなやばいもの撃てるとは思ってた。

ゲームのキャラはよくこんなもの撃てるな。

アル。マとか撃ったらまじ死ぬ。ショック死。

ふらふらとボーっとした午後になってしまった。

この世界。わかってたけどハードだ。

夕飯は食ったのかどうかも分からない状態だった。

「闇だと!？」

ドラウンが大声で叫んだ声は広間に響いた。

ただでさえ多い視線がもつときた。

「つーかなに?自分怒られそう?Mじゃないんでやめてほしいです。」

「ドラウン、うるさい。」

アゼルがしかる。

「おう、すまん。あまりにも唐突すぎてな。」

「闇ってそんなに珍しいのか?」

「おう。初めてみた。伝説の話だと思ってたぐらいだ。」

「ああ。悪の騎士ダークレイだな?」

アゼルが思い出したように話した。

「昔、ダークドラゴンがこの街の現れたときに、どんなピンチから

も救ってきた勇者が、齒が立たなかった。」

おい、勇者。

「だが、ある女騎士が現れ、剣を闇で包み、尻尾を切って、ダークドラゴンは逃げていったという話だ。」

女の騎士かよ。ていうか勇者涙目だな。

「名前はレイ。だからダークレイという名前がつけられた。」

「それからは、ダークドラゴンは闇しか喰らわないと言い伝えられている。」

「へえ。」

つーか、伝説の話短すぎる。

果物を食べて、自分は部屋に戻った。

いや、闇の話ずつとされると自分いかれそうなので。

「はあ・・・。」

帰りたいな。

一日で帰りたくなった。ゲームの世界は世界できつい。肉ないし。いや、そこはどうでもいいけど。

「こんばんは。」

てめえ・・・いま来るのかよ。

「おう。きたぜ私。」

テレパシーを妨害する魔法ないかな・・・？

「これ、テレパシーっていうか。」

なんだよ？

「伝道伝達システム。」

おま。それをテレパシーっていうんじゃないんの？

「うるさいなあ。」

つーか、お前毎日くるの？眠りを妨げないでくれ。

「ええー？心配して、きてあげてるっていうのに。」

ごめん。いらなかな。

「大丈夫だよ。最初のチュートリアルでどこからともなく聞こえる声だから。」

「よしわかった。まあ、ちょうどいいや。俺の属性ってやっぱ心が関係する？」

「ああ。それはもろ、関係する。」

「ああ、やっぱりか。」

「あと、君の闇が強すぎるから、マナの暴発でさっきはイメージしたよりも強くなっちゃったんだ。」

「そういう補正ないとやっていけないからね。」

「まあ、主人公補正はあるよね。主人公だけ変なスキル覚えたり。何が悪い。それがゲームのおもしろさ。」

「それは、どうなの？そうすると主人公だけ育てちゃうじゃん。」

「まあ、いいや。」

「で？何用？」

「そう。なんで君がこの世界にきたかってこと。」

「あ、この流れ2回目。」

「さっきの伝説の話覚えてる？」

「ダークドラゴンがね、もうそろそろくると思うの。」

「あー・・・いやだ。」

「大丈夫だよ。属性が闇なら勝てると思うから。」

「思うからってなにさ？」

「だって、君がそっちの世界でダラダラしてるだけだったら勝てないから。」

「あー。それは大丈夫？」

「なんで疑問形？まあいいけど。駄目人間とかはありえないよ？」

「そこらへんの社会のゴミとはちがうと思うよ？」

「君も社会のゴミに入ることはお忘れずに。」

「なんか回線が途切れた。」

寝る前に適当に本を読もうとなぜかたくさんある中からとってしまった。

「魔女っ子アホっ子1巻」

こんなのがおもしろいなんて・・・。

よみふけた・・・。

駄目だ。おもしろいな。

アホちゃんの天然ぷりがまたたまらない。
そこに痺れるあこがれる。

「ん？」

3巻読んで寝たら、少し遅くなった。

「パラパラパラ」

ん？雨の音がする。

カーテンを開くとどっかの青色一号で染めたような雨があつていた。

青い雨か・・・氷雨の雨も青かったなあ。

カーク君のマナはすごいんだろな。

カーク君から4巻借りなきゃ。

「リヨウ！起きて・・・」

言われる前にかぎを開けてドアを開いた。

「お・・・おはよう。」

なぜか不機嫌そうな顔でこっちを見た。

「そんなに開錠魔法したかったんか。」

「う・・・うん。したかった。」

なんで微妙に子供？

「あとで開錠相殺魔法カーク君から習おう。」

「ああ。開錠よりそっちのほうが楽だ。」

まあ、そりゃそうだろうな。かぎを開けるよりかけるほうが楽だ

ろう。

「今日は雨で何もすることないだろう？」

「いや、まあ。」

ここは否定しちゃいけない？

「だから、城を案内するからな。」

「それ・・・一日で終わる？」

1章 5・雑談（後書き）

今回はFF ジョジョ RPGの基本てきな？w
来週あげるかどうかかわらないですっwごめんなさいっ

1章 6・城（前書き）

更新遅れましたー

詳細はあとがきで。

あ、今更ですけどこの更新は週1ですw

1章 6・城

1章 6・城

朝食をもぐもぐと食った。

正直、本当にうまいです。日本の果物の数倍甘いと思う。

そんなことを考えながら食べていたとき、隣をひよいとみた。ドラウンがすぐく食べていないことに気づいた。

「ドラウン・・・食欲ないん？」

別に体調が悪そうでもないが・・・どうしたんだ？

「いや、いつもどおりだが？」

？の顔をされたので、自分は言葉が詰まった。

日本で言うところのリンゴ2つぐらいだ。これで足りるのかな・・・？

「なんか食べる量少なくないか？」

「ああ。俺は、朝が弱いんだ。どうも食欲でなくてな。自分では、もういつも通りに感じていたから、すまん。」

「ほう。やっぱ、隊の準隊長でもそういうのあるのか。完全な人間なんていないってことだな。」

「ニンゲン？」

はい？

なぜ、そこに疑問を抱いた？逆に俺が疑問を抱いたよ。

「私は、その・・・ニンゲンというのではないぞ？」

「はい？」

意味がわからない。

どう見ても人間だ。ちょっと耳がとんがってるとかあるけど人間だろう。

まず、この人を人間といわず、なんという？

あれ？でも魔族とかの敵キャラって大体耳がとんがってたっけ？んー・・・なんとなくそんな気がしてきた。

「ん、まあいいや。なんでもない。」

「そ、そうか。」

ドラウンはまだ、聞いたがったようだが、自分もよくわからないし、やめておいた。

人間って特別なのかなあ？・・・わからないな。

「リヨウ。」

うしろから、声をかけられた。

「案内いくぞ？」

「本気で、一日で終わるか？」

正直、この城おおいです。

ドラ。エ5の天空城以上にでかい。

「別に全部を紹介するわけじゃないから大丈夫だ。」

「おけい。」

自分は最後にとった果物を食べ終わり、席を立った。

「んじゃあ、いくか。」

「うい。」

さあ。始めました。ポケ。ンだと大体1回はある、案内のおじさんタイムです。

なんか、すごく広いところにきました。

なんかたくさん人がいる。

「ここは、練習場。魔法の試しうち、武器の素振り、練習試合などもやるときある。」

「ん？魔法の試し撃ちにしては、どこもこげたりしてないな。」

なんかすごくきれい。みなさん練習してるんです？

「ああ、ここは全体が魔法吸収で囲まれているからな。放ったって全部吸収される。まあ、威力は測定されるし、中々便利だぞ？」

「なぜ、俺は外でやったんだよ？」

「昨日は、少しここが使えなかったんだ。仕方ないだろ？」

まあ、いいか。

「魔法うつてみていい？」

少し慣れておきたい。正直本番使える気がしないんだ。

「おう、なら私とやるか？練習試合。」

「だ、大丈夫なん？」

正直怖い。あんな闇がアゼルにあたったら自分、ほかのみんなから殺される。

「なめるなよ？逆にお前が死ぬかもだぞ？本気でこい。剣もありだ。」

少し力チンきました。

「うし。いくぜ？」

「はいはい、早くきなさい。」

なんか余裕かましてる顔がうざい。

「ディオガ・ラビドン！！」

正直きもちわるいほどの大きさうちました。

いやぁ・・・これは・・・。

だが、その闇は簡単に中心に向かっていった電撃で消えた。

正直ザケ。ガ程度のやつで消された。

「電気・・・？」

「そつだが？いつてなかったか？」

赤い髪なんでイメージ火です。

まじ、シャ。みたいなイメージでした。

「ま、まだまだだな。」

上には上がった。

「なら剣もやってよい？」

「おう。いいぞ。さやは付けたままな。」

もお、朝から背負っていたバスタードソードを手にとり、どうやっていじめてやるうかと思った。

すみません。Sですが、なにか？

そして、やってみたかったことをやる。

闇を剣にまわせて、その闇をとばす。

「月牙。衝！」

うわ。出来た。

黒崎さんはこんな楽しいもんを放ってたんですね。

「おー。」

アゼルさんは感嘆の声を出した。

「つかアゼル、武器もってるのか？」

そうすると、アゼルの手前でダガーみたいなものを腰の辺りから出した。

ダガーっていつか刀身が曲がってる。なんだあれ？

「ジル！」

アゼルは銀の刀身の武器を黄色く電気を浴びさせた。
すると、月牙は簡単に切られた。

「まだ、接近戦はできないだろ？ もおいしいか？」

「う、うん。」

くっそ・・・やっぱりさすがは隊長なだけはある。

つか、こんな簡単に敗北感を味わったのは初めてだった。

「もう、魔法剣ができるのか。」

魔法剣ってダイの大。険とか、FF9のあれですか？

まあ、闇をまといてるしね。そりゃそうか。

「一応できた。イメージできには。」

「そうか。やはりセンスてきなものはあるんだな。」

なんか腹立つ。自分と同じくらいのやつだから余計にはらたつ。

「例えば、さっきの武器なに？」

なんかよくわかんなかった。

「ああ、これはククリだ。すこし曲がっていて、相手が間合いをとりにくくする武器なんだ。あんまり使う人はいないんだけどな。」

「へえ。」

なんか使いづらそうだけどな。

「ほれ、後で素振りとかするとして、次いくぞ？ つぎ。」

「ああ。ほいほい。」

なんか、いつのまにか見られているところから自分は去った。そうだよーえ・・・一応姫だもんね。隊長だもんね。

まあ、指揮とかも入るのかもだけど、あのドラウンよりも強いってことだろうし・・・。

負けるのは当たり前・・・か。

いや女の子になぜ負けなきゃいかん。いつかギャフンと言わせてやろう。

正直、ギャフンといったことがあるやつ見たこと無いけど。

「ここが、隊専用図書室だ。」

みるからに中々の広さ。

絶対一人はいるガリ勉君。あとは、たむろってたり普通に読んでいたり。

「なんか・・・読むものあるか？」

俺が見つけたのは・・・。

「魔女っ子アホっ子3巻」

4巻ないのか・・・。

カーク君・・・貸してくれ。

「あー・・・たくさんの武器に関するやつある？」

「お。あるぞ。」

真ん中らへんの棚から中々分厚いのをもってきた。

これは、後で熟読しよう。

「ここには、そういう武器に関するものから、一応属性ごとの応用技などの本もある。お前の闇はないがな。」

「ないのかよ。」

まあ、期待はしてなかったが。

自分で応用技考えるほうが楽しいし。

だけど、カーク君の氷雨の闇バージョンは、うちます。

お、応用技だよ？うるさいな。
パクリ技？知らないよ。

「姫様。」

なんか、少しかわいい男の子がきた。

みるからに勇者になりたい。みたいな子。

デイスガ。ア3のアルマースみたいな。

「ん？なんだ？」

「やっぱり武器なら・・・。」

なんか話が長くなりそうなので自分は棚を色々見て回ることにした。

本当広いな。普通の図書館ぐらいの広さはある。

そして、俺はひとつの本に目がいった。

ん、この本・・・まさか。

「初めての冒険」

題名からして惹かれる。

そして手にとろうとする。

すると、

「あつ。」

「ん？」

手と手がぶつかる。

なんかベタな展開k t k r。

1章 6・城（後書き）

すみませんっ 中間テストがあり、完全に無理でした。
そして今回、ネタが豊富です。正直書きすぎて しまったw
まあ 大体わかるネタだよねw
ではみなさん。次回もよろでしw

1章 7・出会い（前書き）

一日送れてすみません。

1章 7・出会い

1章 7・出会い

「これが・・・こいつのとの初めての出会いだった。」

うん。初めての出会いだけどそれがどうした？

この自分の歳〓付き合っていない年数の俺ですが？

「あ、う、あ・・・。」

なんか、手さわつちやたからってそんなびられても。

「あ、ゴメン。」

「はわわわわ。く、くく黒髪さん・・・です？」

やべえ。すげえきよどってるんだけど。

どうすればいい？

「そうさつ。私が黒髪。そう。白井獺なのさ！」

あ、あせった。どこのキザキャラだよ。

キャラが定まってるないよ、自分。

「え、えつと、私ニユイといいます。す、すみません。」

なんか謝られちゃった。

ニユイさんかあ・・・。かわいいなあ。

「そう、これが、ニユイとの初めての出会いだった。」

うん。もう、いいや。

変なフラグを立てるのはよそう。

「ニユイっていうんだ。いい名前だね。」

うつわー・・・空々しい会話。

つか、どした？おれ。変なフラグの立てすぎで、緊張してる？

そんなもじもじしている空気の中。

「あ、この本どうぞ。」

さっき手にとろうとした、「初めての冒険」を渡してくれた。

「あ、別にそんな読みたいって思ったわけじゃないから、いいよ？」

「あ、いえ。私はもう、二回読んでるんで、よかったらどうぞ。私的には、かなりオススメですよ。」

二度読みするほどおもしろいのか。

「あ、ならもらつとくよ。ありがと。」

もらつて表紙絵を見ると、主人公が剣を構えている。
かつこいいなあ。

「では、私はこれで。」

「あ、うん。ありがと。」

ニユイは、そういつて、ちがうところに行つてしまった。

なんか、最初はきよどつていたのに、後は、なんか話慣れしてる
っぽかった。

クールな子だ。

まさか、あれがクーデレ？

クーデレはいいなあ。かわいくて、かつこいい。そして恋の熱は
すごい。

うーん、フラグは本当にフラグになるかもしれん。

クーデレで思い出したけど、そういえば、昨日会ったツンデレの
子の名前聞いてなかったな。

お礼もちやんとしたいし。

「ほう。ニユイか。」

なぜか背筋に寒気がはしった。

「あいつは、隊の中でもトップクラスのかわいさだからな。」

いつのまにか、うしろにアゼルがいた。

「それはいいけど、なんで、俺に言う？」

「いやらしい目で見てたからな。」

「見てねえ！」

大きな声を出して、こつちにもつと視線がきた。

「図書室ではお静かに。」

「つ・・・だけど俺はそんな目では見ていない。」

小声でもう一度言う。

正直そんな目では見た覚えはない。

かわいいとは思ったけど。

「まあ、いいか。ん・・・「初めての冒険」か。それは中々おもしろいぞ。」

「やつぱり？ニユイさんもオススメって言ってた。」

「まあな。どんなにフラグを立てても、敵を倒していくっていう漫画だ。」

「それはおもしろそうだな。斬新で。」

表紙絵で思ったけど、この本やつぱ、漫画なのか。

図書室に漫画があるのか。それはいいな。

「そして、リヨウ、すまんが、武器の説明をするはめになったから、案内はまた今度な。」

「お、まじか。わかった。」

一日でやつぱり終わらなかった。

ん・・・なんかやること無くなったなあ。

クリもないし、クエストやってこようかなあ・・・。

考えながら図書室を出た。

廊下で話し声が聞こえた。

「今からカークとトムが練習場で魔法勝負するってよ。」

「早く行かなきゃ！」

トムってあの、トムとジェ・・・なわけないか。

カーク君ってことは・・・すげえ魔法勝負になるんじゃないか？
なんか見に行きたくなったから行ってみる。

練習場への道はさつき行ったからわかるしね。

はい。わかりませんでした。なんか流れていく人について行きませんでした。

アゼルの案内・・・意味ないかも。地図くれ。

練習場に着くと結構人がいた。

「絶対に許さないからな！」

カーク君が珍しく大声だしている。ケンカっぽいな。なんか・・・原因がわかった気がする。

「仕方ないだろ！まちがえてこぼしちまったんだよ。」

トム君なかなかイケメンボイス。

あ。関係ないね。

「っ」か予想当たったばいな。

「僕の、僕の・・・アホの顔にこぼすなんて・・・絶対・・・絶対許さないからな！」

「ブツ。」

完全に吹いた。

周りの皆もかなりわらっている。

「まあ、久しぶりにお前とやれるからな。いくぞ！」

トム君反省してなくね？

「氷雨！！」

カーク君が早くも、氷雨を撃った。

「詠唱時間が短くね？なんでだろ・・・。」

昨日クエで撃った時は時間がかかっていた。

「それは、今日は雨だからだな。」

いつのまにか後ろにドラウンがいた。

今日はなんだか、後ろから声をかける人多いな。

「雨？なんか関係あるの？」

正直意味がわからない。

「雨はな、マナを含んだ水なんだ。マナは青いんだ。だから、そこらじゅうにマナを含んだ空気になる。それで、魔法の威力、詠唱時間が上がったり、短くなったりするんだ。」

ああ、だから雨は青かったのか。

雨もすごいもんだな。

「ウインド！」

トム君が、上から降ってきた氷雨の軌道を風で変えた。

「カーク。そんな、魔法じゃ俺を倒せな・・・」

「雪月花！」

カーク君が、目の前巨大な氷の花を出した。

その氷の花が、散って、小さな氷の花びらとなった。

花びらは一気にトム君に向かってとんでいく。

「跳ね返せ！竜巻！」

氷の花びらは一気にカーク君に向きを変えた。

なんかレベル高い。

「アイスウォール。」

氷の壁がカーク君の目の前に現れた。

その壁に花びらが刺さった。

「こっちからもいくぞ？真空刃！」

空を切っているような音が聞こえる。

その真空刃も壁にあたったが、半分までしか行かなかった。

「厚いな。」

トム君は舌打ちをした。

「カークも強くなったな。」

ドラウンが関心したように見ている。

正直強すぎない？

「よし、爆ぜろ！フルバースト！」

この分厚い壁が無数の氷となり、発射された。

「ハリケン！」

氷は無数の風の刃で消されていったが、あと少し足りなかった。

氷はトムくんの体切っていった。

「アホの痛みわかったか！」

「くそ・・・。いてえ・・・。」

カーク君がトム君に近づいて、起き上がらせた。

なんだかんだいって、カーク君いいやつだな。

「リヨウもあんなふうになるんだろうな。」

ドラウンが横目でニヤリとした。

「無理だ。」

正直強すぎる。無理です。

「まあ、まだ早いな。」

「ですよー。」

「さてと、俺も行くかな。武器整理が終わってないところにこの話がきたんでな。」

「おう。いてらっさい。」

ドラウンは練習場から去っていった。

さてと、どうしようかな。

初めての冒険読もうかな。

もう一度自分は図書室に行つて、閲覧ができるテーブルにすわり、読んでいた。

やばい。これもおもしろい。

本当にフラグ立てすぎ。

まだ6巻までしか読んでないけどすげえおもしろい。

「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ。」

死亡フラグ。

「や、やったか!？」

やってないフラグ。

「どうせ俺はこの戦いで死ぬんだ。」

生存フラグ。

「未だかつてこの技を避けたやつはいないのさ。」

避けフラグ。

「君は絶対に死なせないよ。」

なぜかの告白。

「明日その秘密をバラしてやる。」

バラすの忘れるフラグ。

「大変な事を知ったんだ!明日会えるか？」

用事フラグ。

「明日は娘の誕生日なんだ。」
事故フラグ。

こんなフラグを回避したり、そのままフラグ通りになったりする。
主人公のフラグ立てすぎは笑った。

「お、まだいたのか。」

アゼルが終わったのか、また来た。

「なかなかおもしろいからね。」

アゼルが隣の席に座った。

「なんか、カークとトムの対決あつたらしいな。」

「おう。正直強すぎ二人とも。」

「そりゃ隊で4、5番らへんの実力だからな。」

「あれで4、5番かよ。」

あ、そういえば、アゼルも隊の中に入れるなら3番には入っているだろう。隊長だし。

「それでな。ちょっと明日、クエスト試してみないか？」

「お、いいね。」

正直自分の金がほしい。

「ニユイもくるぞ？ありがたく思え。」

「・・・へ？」

なぜ？

1章 7・出会い（後書き）

ねたが多いけど・・・ちと眠いのでパスw

1章 8・でっかい機械

1章 8・でっかい機械

「あ、黒髪さん、おはようございます。」

うわ、ニユイが本当にいるよ……。

なんか本当に緊張してきた。

昨日、アゼルにクエストを誘われて、小遣い稼ぎが出来ると思ったのだが、ニユイも来ると言われた結果だよ。

「ああ、来たか。地味に遅いな。」

「うるさい。髪の毛ぼっさばさだったんだよ。」

寝癖がひどくて、どっかのサイヤ人だったよ。

ていうか、そういうのも気にしてるってことは、かなり俺、緊張してない？気のせい？

「それじゃあ、いきましようか？」

手を合わせて首をかしげてこっちを向いている。

ああ、かわいいわあ。

ん？待てよ。もし俺が、ニユイのことを好きになった場合は次元のやつを好きってことになるのか？

それともこれは世界としてなっているから三次元なのか？

まあ、好きになることはないだろうから大丈夫。多分。

だって、俺は……。

「リヨウ、いくぞ？」

「あ、はいはい。」

まあ、まずはクエストだな。

クエスト掲示板を初めて見た。
小さいです。思ったより。

そろそろ続編が発売する狩りゲームの集会所の掲示板よりも小さいです。

しかも、掲示板なのにハイテクです。機械です。

これ掲示板っていうの？なんか、図書館とかである、本を探す機械を少し大きくした感じだよ？

まあいいや。細かいことは気にしない。

「どうするか？」

「どうしますかね？」

「俺、よくわかんないから任せる。」

なんか見る限り、やっぱり図書館の本を探すのと一緒にだ。

「お、珍しいな。古代の機械巨人があるぞ。」

「あ、いいですね。」

コダイノキカイキョジン？

「なにそれ？」

名前からして強そうなんだが。

「なんかでっかい機械。」

アゼルさん、アバウトすぎてわからないです。

「昔、作られた機械兵ですよ。昔は国を守るために作られたのですが、なぜか最近、町を壊したりしてるんですよ。」

「アゼル、ニユイさんのほうがちゃんと説明してるぞ？姫としてどうなんだ？え？」

「う・・・。」

「あ、黒髪さん、さんはいりませんよ。ニユイでいいです。」

駄目だ、萌え死にそう・・すみません。嘘です。いつてみたかっただけです。いつてないけど。

「わかった。」

「待て、でっかい機械でもまちがってないだろ？説明としてはまちがってない。」

「はいはい、行こうかニユイ。」

「リョウ、お前、場所わかんないだろ？」

・・・。

「だからな？でっかい機械だから。見ればわかる。それしか思えな
いはず・・・。」

「まあ、いいよ。」

こいつ・・・姫じゃねえ。

「姫も黒髪さんもそろそろですよ？」

「へ？」

いないけど・・・？

「この崖からきま・・・。」

「ブオオオオオオ！」

すげえ機械音。

崖の下から機械の頭が出てきた。

あれ・・・？これ、どっかで見たことあるよ？

「ほれ、リヨウ、でっかい機械だろ？な？」

「ま、まあ、そうだな。」

俺はそれよりも最初に遊。王のアンティー。ギアゴーレムがイメ
ージにうかんだよ。

つか、古代の機械巨人つてもろ、それじゃねえか。

ルビがふってなかったからわからなかった。

「おい、ほら言ってみろ。でっかい機械だろ？」

アゼルもちよつと引きずりすぎ。

「わかったから。」

正直こわいです。

あいつ攻撃力3000あるじゃん。

「姫、もうはじめますよ？」

なんか、もうニユイもうんざりしているようだ。

「よし、いく・・・。」

このゴーレムさん。なんか手を上げて腕を回転させてるんだけど・

・。

「どした？新たな拳手法ですか？」

「あ、チョップきますよ？」

「はい？」

「ドオオオオオ！！」

数メートル横にでかい腕が攻撃してきた。
砂ぼこりが舞う。

威力ありすぎだろ。

「リョウ！腕を片方ぶったぎってくれ。」

はい。そんなこと無理です。

「どうやって？」

「思ったよりやわいから大丈夫だ。」

「まじか。」

自分は前にやった、月牙を放つ。

正直、月牙かつこいいです。

月牙はゴーレムの右腕を切った。

ぶらんと腕がぶらさがってから腕は落ちた。

バチバチとしている。

「黒髪さん、少し危ないですよー。」

ニユイはいつの間にか弓矢を構えていた。

つか、弓青くてかつこよすぎるよ。

青というより、蒼か。矢も普通の矢と何かがちがう。

「ん？でも、矢刺さるの？」

もどつて、構えてるニユイに聞く。

「魔法矢ですよ。」

俺の質問刺さるの？きいたよね？あれ？

「あ、魔法矢みたことないんでしたね。なら射ますよ？」

ゴーレムにむかつて矢を射る。

その矢は、ゴーレムを貫通した。

「すげえ。」

「魔法矢は打撃ダメージじゃなくて属性で攻撃します。私のは水な
んで水攻撃ですね。」

「かけー。」

ゴーレムは一気にダメージをくらったよう。

「落雷！」

アゼルが後ろから魔法を唱える。

その上から、一気に雷がおちる。

ゴーレムは粉々になった。

「うわぁ・・・。」

なんか、本当にこの隊のレベル高いと思うよ。

「つーか、最初から落雷放てよ。」

「え？あぁ。ゴーレムは一定ダメージ以上与えないと、電気を吸収
してしまうんだ。」

「あぁ、なーる。」

そういう設定もちゃんとできてるのか。

「よし、なら帰るか。なんかものたりないけど。」

「はい。」

「わかったぁ。」

とある場所。

「ゴーレムの腕を真つ二つか・・・。」

「あれが、いま、うわさの・・・。」

「殺しがいがありそうだな。ククク。」

敵フラグ？

1章 8・でっかい機械（後書き）

すみません短くて。

つぎはちゃんとかきまー

2章 1・神からの説明（前書き）

遅れてすみません！ニコ生とかやってたら完全に忘れてた。

2章 1・神からの説明

2章 1・神からの説明

みなさん異世界ってご存知です？

自分の世界とはちがう世界。

それをそのまま異世界といいます。

異世界の範囲はどこまでか。そんな基準はきまっていない。

そう、この宇宙のどこにいてもその異世界はないのかも知れませんが。

この宇宙を含めた世界とはちがう世界を異世界なのか。

それとも宇宙のどこかにワープゾーンがあるのか。

そんなことを思っているとワクワクしません？

漫画の中の世界。おとぎ話の世界。色々もあるかもしれません。

この世界は、ゲームの世界。

誰もがいつてみたいとは思うのではないのでしょうか。

ゲームじゃなくなつて、魔法が使えたらいいとか、武器が使えたらかつこいいとか。

そんなこと思つたことはありません？

自分があります。

そして思つた結果がこれだよ！

へ別に思わなくなつて、結局はこういう運命だつたんだよ。ㇿ

なんでだよ。

ニユイとアゼルとクエストにいったあと、少し睡眠がたりなかったのか、すごく眠くなつたので、ベッドでねころんでいたら、神が出てきた。

へ一応、君は選ばれた人だから。ㇿ

意味わかんない。

「神様たちが悩んで悩んで、選んだんだよ。君を。君がゲームの世界に入ってみたいなんて思ったって思わなくなつてここに来てたの。」

「なぜ俺になつたんだよ？」

「そりゃあ、選ぶときにパツと人間界を見たときにいたのが君たちだつたから。」

「悩んで悩んでつて反復法まで使つといて完全に適当じゃねえか。」

「え？なんかいった？」

「だまれ、餓鬼。」

「あんたなんかよりは、絶対生きてるから大丈夫。」

「おま・・・何歳だよ？」

「人間でいうと・・・12京ぐらいだね。」

「12京つてどんだけだよ。」

「人間が100歳生きるとしても、1200兆倍の歳。」

「そ・・・そうですか。」

「なんか、本当に痛い子にしか感じなくなってきた。」

「仕方ないじゃん。人間と基準がちがうんだよ。」

「お前は神だけで人間の体をもつてないん？」

「よく、意味がわかんないんだけど・・・。」

「んーと・・・人間とは体の仕組みがちがうん？」

「あーあ、仕組みは色々ちがうかなあ・・・。人間でいう心臓なんて5000個ぐらいあるかな？」

「まじで!？」

「うん、嘘。」

「お前。ここにこい。一発なぐる。ゴットフィンガーでなぐる。」

「あ、ガンダムの力なんて余裕だから。」

「どうやってガンダムの力をわかつたんだよ!？」

「え？地球破壊できない程度でしょ？」

「あんたらの基準は星単位かよ。」

「なんだ・・・この神どもは。」

「まあ、その話はおいとこう。」

「え？ 終わりなん？」

「いや、いいけどさ？ そろそろ説明しよかなって。」

「なにを？ 正直あんたの説明学校で一番ばあさんだった説明よりわかんないんだけど。」

「まあ、そのばあさんより歳とってるからね。」

「神なら説明力もあるんだろ？」

「正直、心の中でニヤツとした。」

「んーと・・・詳しく説明して、君が伝わるのならいいよ？ この世界の座標の77」

「普通にお願いします。」

「あい。」

「くそ。 どや顔してやろうと思ったのに。」

「あきらめなよ。」

「まあ、早く説明してくれ。」

「えっと、その世界・・・えと、ソシャミサに変なもんが異界からはいりこんだんだよ。」

「この世界ソシャミサっていつのか。 初めて知った。で？ それが？」

「ぶっちゃけていうと、それを倒してくんない？」

「は？ なぜに自分？ この世界のことでしょ？」

「はだって、そのために君にここへきてもらったんだよ？」

「ああ、そうだったのか。」

「って、やだよ？ だってその相手がステータス的に神ぐらいだったら泣くよ？」

「ああ、それはないと思う。 なんか思考発信遮断機能使って、よくわかんないからさ。」

「それは・・・大丈夫なの？ そんな変な技覚えてるやつなのに？ へたぶん。 正直言って、君の隊の人強すぎるからね。」

「あ、俺頼みじゃなくて、この隊の人頼みなのね。」

「いや、そういう意味じゃないけど。」

おい、いまあせつたる？

「いや、君も正直強いから。」

自称神に言われてもな。

「私より強い存在っていつたらあと2人ぐらいしかいないんだよ？

感謝しなさい。」

神なのにもっと上がいるのかよ！？

「うーんと、別に神っていつても、まだたくさん神いるしね。」

ああ、そうか。そういえば神達が創ったゲームの世界だもんな。

「いや、地球も私たちだけど？」

へ？

地球とかって原始惑星がどうたらって話じゃないの？

「うーん、その原始惑星を集めて衝突合体とかさせたのが神達なのさ。」

うわぁ・・・スケール広いです。

あと、正直、何言ってるかわかんないです。

「ま。どうでもいいけどさ。よろしくね？」

はいはい。報酬は、はずんどいて。

「あー・・・うん。なんか考えとくよ。」

よし、いったな？

「ちゃんとできたらね。」

おーけー。

明日、アゼルに話してみるか。

朝食のときに言い出そうと朝から考えてみるものの。

唐突すぎないか？

どうやって説明するんだろうか？

「どうした？リヨウ。」

「あ？ああ。なんでもない。」

タイミングはちゃんとみきわめてから・・・

「嘘付け。なんか悩んでるんだろ？」

まじかい。タイミングさんがログアウトしました。

つか、なぜ気づかれた？俺の顔なんか書いてあった？

いや、こつちの世界だから・・・

「魔法か！」

「いや、なんとなくだ。」

自滅したあ・・・。

深読み&早とちり乙。

「で？なんなんだ？」

「えーとね。」

だらだらと昨日の話を始めた。

神の話はしなかったけど、自分がなんでここにきたのかっていうのを伝えた。

たぶんあつてるよね？

「ほーう。で、手伝ってほしいと？」

「できたら。」

つか、そうしてくれないと、たぶん自分そいつ倒せない。

「まあ、それはいいんだが、お前がそんな強さだとなあ。」

ですよねー。

「まあ、色々と技術を与えてからだな。そいつ等の場所もわからないしな。何か事が起こってからで大丈夫だろ。」

「それで大丈夫なん？」

そんな余裕ぶっこいていいの？

「だから、場所がわからないっていつてるだろ？別にそいつらが何もしなければほっといていいしな。」

「うーん・・・。」

神がいつてるぐらいだから、危ないかもしれないけど・・・。

「まあ、心配するな。私たちついてるしな。」

「まあ、こつちも動けないし仕方ないよな。」

どうしようもないな。
それがいい判断かは別として。

なにをしよう。

なんか重要なことを話したら気がぬけた。
うーん、何をしようか。

自分の部屋でねころんでいると。

「トントン」

「はい？」

「黒髪さんいますか？」

うわ、ニユイだ。

うわってなんだよ俺。

「どうしたの？」

ドアを開くとニユイがいた。

「あ、えーとですね。」

うわあ、かわいすぎるわあ。

いや、待て。平常心。

「ん？」

「組み手しませんか？」

組み手？

あの柔道のあれですか？

「なにそれ？」

「え、えつとう・・・。」

あれ、なんかきよどられちゃった。

「組み手はまあ、練習試合みたいなもんだ。」

ドラウンがうしろからやってきた。

はあ、そういうことですか。

「ん。それ自分とやるの？」

「やりません？」

それは、ニユイさん？僕をいじめたいんですか？

2章 1・神からの説明（後書き）

次こそ長くします！すみません。

2章 2・練習試合

2章 2・練習試合

「わぁ・・・。」

なぜか、感嘆の声を上げているが。

正直言つて、これ鬼畜すぎない？

魔法矢が自分に向かって、前と上からとんでくるんですよ？

しかも中々速いし、量も多いよ。

ゴーレムのときは、一本だったのに、なんでこんなに多いの？

と、思つてよくみると、一本の魔法矢が途中で、無数に分かれて20本ぐらいになつてる。

これ、きついな・・・。

「リョウ！攻めに転じろ！」

ドラウンがうしろからアドバイスしているが・・・。

「やれるならやってるわ!!」

うん。出来るならやってる。

つーか、まだ声を出せる余裕はあるんだ。

なら、集中しろ。考えろ。チャンスをみつけろ。

はい、そんなこと無理です。

前からとんでくるならまだしも、上からの矢もあるので、これはきついわ。

ソードではじいたり、ぎりぎりの間をぬけるしかないわ。

こういう間ぬけるのは、ロマ。ガとかでモンスターかなりよけてたなあ。

いや、待て。ちがうことを考えるな。

闇をとばしてみるか。

矢と矢の間を見極めて放つ。

針のように伸びた闇は途中で2回ほど矢にあたり、消える。

「間だよ、間！」

「いま、やったる！？」

うん。無理でした。

そんなこと考えながら避けて、はじいて、相殺したりと。

どうしよう。よけるので精一杯です。

そして俺は、思いついた。

自分が考えたのは、ニユイだって女の子だってことだ。

スタミナ切れ。もしくはマナ切れを狙えるんじゃないかと思った。
だが、スタミナ切れは、一本の魔法矢を射って、その一本の矢が
20本ぐらいになるので、スタミナは切れる気がしない。

マナはどれくらいで切れるのかわからないけど、涼しい顔をして
いる。

いや、かわいいなあ。

おい、待て、邪心消えろ。

そんなこと考えながらも避けれてるぞ。余裕がでてきた。

「前にすすめ！あきらめんなよ！」

おい、なんか聞いたことあるフレーズきたぞ？

まあ、ちよつとすすめるかな。

はじく、進む。よける、よける、はじく、相殺、進む。

これで少しずつ進む。

モン。ンのランスでガードしながら進むのを思い出した。

「そうだ！その調子だ。」

ドラウン、うつさいな。

そんなことを思った瞬間。

「黒髪さん、いただきますよー。」

なぜか、少し笑顔で言われたが、ニユイが4本の指で、三本の魔法矢をはさんで射った。

その三本の矢は、一気にわかれて・・・ってうおい！

自分はうしろに下がりつつ、一気によけた。

はい。振り出しにもどりましたあ。

なんか、タネマシ。ガンの強化版みたいだね。

だが、自分はもう、頭が冴えてた。

剣に闇を送り込み、地面につきさした。

「ダークウェーブ！」（今、命名。）

闇の波を地面に差し込んだところから、ニユイにめがけて出した。

矢は闇に飲まれて、消えていく。

「うし、いける。」

波の影に隠れて、一気にすすむ。

これで勝てると・・・思った。

だが、闇の波がくずれた。

ゴーレムを射った矢がないはずないよね。

なんか、体がすごく寒い。

「黒髪さん・・・？」

ニユイの声が聞こえる。

目を開けるとニユイの顔が目の前にあった。

正直言つて、目を半開きにして、ずっと見てたかったです。

もお、遅いが。

「あ、よかった、黒髪さん。」

「リヨウ、おきたか。」

ドラウンが横にいた。

周りを見ると、なんか鎧とかたくさんある所にいた。

近くの暖炉が暖かい。

なんで、暖炉があるのに、さっきまで寒かったんだ？

「ここ、どこ？」

「俺の部屋だが？」

なんか言われるとそんな気がしてくる部屋だ。

「ニユイ、リヨウを見ていてくれ。姫に呼ばれているんな。」

ドラウンがそっぴいながら立った。

何の話だろうな。

「はい、わかりました。」

「え？」

ちよっと待って。

これってドラウン行っちゃうと二人きりじゃん。

なんでそんな、ニユイは冷静なの？

俺だったらあたふたしてるよ。

そして、ドラウンは去っていった。

なんか、落ち着かなくなってきた。

「そういえば、黒髪さん、体、寒くないですか？」

「え？」

そういえば、さつき・・・寝ぼけているときの、体が寒くなる感覚だと思ったのだがやっぱり体が、寒いというより、冷たかったのだ。

「うーん・・・なんで？」

「さつき、私の魔法矢もろに受けたので。」

「ん？どういうこと？」

くらった覚えはあるけど、絶対零度で一撃必殺になり、氷漬けになった覚えはないんだが。

「えっと、私の魔法矢の属性が水って話をしましたよね？」

「あ、うん。」

そういえば、昨日、言っていましたね。はい。

「えっと、私の水の矢は、相手に水のダメージを与えつつも、相手の体温も奪うんですよ。」

それ、なんていうイジメ専用技？

「だけど、あいての剣とかにあたると、その剣が冷えて、切れ味があがるんですよ。そこが弱点ですね。」

あ、イジメ専用ではなかった。マゾ専用でもあったのね。

「へえ・・・。うん、大丈夫だよ。暖炉のおかげで、暖かいぐらい。」

「そうですかあ。よかったあ。」

ホッとした様子で、したから覗くように見られた。
本気でかわいいわ。

「でも、もう少し寝たほうがいいですよ？自分のにも少し怖いんで。」

「そんな魔法矢で挑んでこないでください。」

「いや、もう大丈夫だよ。心配しなくていいって。」

正直あまり、言われるとこっちも困る。

「そうですか。ふあゝゝゝ、なんか安心したら眠くなってきちゃいました。」

すこし笑ってニュイが言った。

「あ、じゃあ、休んでいいよ？本当に大丈夫だから。」

ニュイも疲れたなら、いい練習試合になったかな。

「いいんですか？」

「うん。」

そんな子猫みたいな目で見ないで。

「ならゝゝゝ。少し寝かせていただきます。」

そして、ニュイは部屋に出てゝゝ

と、自分は思ったんだ。

ニュイは俺の考えとは裏腹にそのままコテンと横向きでねた。

「ふええ！？」

なんか変な声を上げてしまった。

ニュイの顔との距離が30センチぐらいしかない。

自分はすぐに体を起こしてしまった。

「え？だ、駄目ですか？」

少しきょとりながら言われた。

「いや、いいけどさゝゝゝ。いきなりでびっくりしちゃって。」

「そうですか。すみません。」

自分はまた寝転んだ。

「ちゃんと添寝してくださいね？おやすみなさい。」

「へ？」

そ、添寝ですか。

俺、人生で絶対そんなこと言われないと思ってた。

ニユイは小さく寝息をたてて寝ていた。

そんなに、疲れてたのかな。

そんな顔をジッとみながら、やっぱりかわいいなと思う自分はそろそろ変態。

俺も寝ようかな。

ニユイの顔をみていたら、自分も眠くなってきてしまった。さつきまで寝ていたのに。

まあ・・・添寝だしね。寝よう。

そのまま夢の中にはいつていった。

「はい、こんにちわあ。」

てめえは、夢にまで出てくるのかよ！！

「え？でるけど？」

・・・。

「いや、用はないんだけどね。」
なぐつていい？

「殴れるなら。」

そんで？本当はなんのようさ？

「いや、本当に暇つぶし。」

暇つぶしに自分のところにこないでください。

「わかったよ。あの件どうなったの？」

あの件？ああ。侵入者の話ですか。

「そそ。」

えーと、なんか保留になった。場所もわかんないしねって。

「そっか。まあ協力はしてくれるんだ？」
たぶん。

「なら、よかった。」

「ん？やけにおとなしいね。」

「いや、そのニユイって子を起こすといけないからね。」

「女子にはやさしいのな、レズめ。」

「いや、思考回線が近くの人にもいくかもしれないからね。」

「ああ、そういうこと。」

「で？このニユイって子はどんなの？」

「ん？見ればわかるじゃん、かわいいね。」

「好きなの？」

「うわ、率直すぎるね。それは・・・俺の過去見ればわかるんじゃないの？」

「ん・・・？なんか過去があるの？」

「うわ、やめて、俺の過去さぐらないで。」

「いや、それは、神の中でもやめておいているんだ。禁止はされていないけど。」

「あー、ナイス。暗黙の了解か。」

「で？どんな過去さ？」

「うーんと・・・。」

「話したくないのなら・・・。」

「結局見るんかい！わかった。わーったよ。」

「過去・・・ね。」

2章 3・過去

2章 3・過去

俺には好きな人がいたんだ。

「ほう。」

それは、1年のときの1学期末あたりの体育祭のときなんだ。

「はああ・・・。」

くじで、体育祭の準備係になってしまった。

そういうのは、やりたいやつやらせてやれよ。

あの先生は変なところで、挙手制にしないからなあ。

「ドンマイ。」

うしろから、清水が声をかけてきた。

別に準備係なんて簡単なんて思われているのだろうが、正直言って、体育祭をかなりつぶされる係りだ。

前日の準備ならともかく、ほかの競技の用具を出したりする仕事をしていると、体育祭のときに、自分の席で応援ができない。

なので、用具係＝体育祭が楽しめない。

「来年がんば。」

清水が後ろから肩をポンと叩いた。

もう、来年まで楽しめないことは、清水の中では決定されました。

「何言ってるんだ。今年だって、エンジョイしてやんよ。」

「せいぜいがんばるんだな。」

それだけ言って教室から出て行った。

「う、うっさい。」

廊下に出た清水には聞こえないような、小さい声で言った。だが、このクジのおかげで自分は新しい出会いをした。

そして、ついに体育祭の一週間前。

万国旗の準備に入るので、準備係は集められた。

「ん？1年の深原玲奈」ふかはら れいな」はまだか？」

先生が全体を見回しながら言った。

「すみません！遅れましたあ！」

ドアを開け、少し汗をかきながら入ってきた。

それが深原との初めての出会いだった。

「嘘こけ。1学期末ついたら3ヶ月ぐらいたって初めて会うわけないでしょ？」

そこで話をきるのかお前は！？

「だって、話作ってるでしょ？」

つくってねえよ。俺の学年8組あつたし、もし見たとしてもまじと見てない。イコール会ってない。

「そ、そうなんだ。」

もついくよ？変なところでザ・ワールド使うなよ。

「はいはい。」

深原は俺のよこに体育座りで座った。

「いまどころへんなの？」

深原は初対面の俺に聞いてきた。

「進行のこと？」

「うんうん。」

うなずきながら言った。

「まだ始まったばかり。何も説明されてないし。」

「あ、そうなんだ。ラッキー。」

少し小声だったが、弾んだ声だった。

「いまから万国旗をひもにつけてもらいます。」

体育の先生が、万国旗とひもを出しながら言った。

「なんで、つけたまんまにしないんだよ・・・。」

「だよー。ずっと校庭につけててもいいと思うよ。」

そっちのつけたままじゃないんだが。

そんな天然なところがよかった。

「君、変態？」

なぜ！？

そしてまた回想は止まるのかよ！？

俺、いま夢の中なんだよ！？

「その夢のおかげでそのときの感じが思い出しやすいでしょ？」

知るか、そんなの。

「それでさ、今、現実でさわぎになってるんだけど、おきたほうがいいかも。」

お前が話をとめたりするからじゃねえか。

「え？私のせいなの？」

一応な。つーか変態って・・・

「ばいばーい。」

くそ、一回死んどけ。

「神にそんなのいつでも仕方ないか。」

「へ？」

ニユイがこっちを見ながら本を持っていた。

周りを見ても何もおきてないようだ。

神のやろつめ。

「あれ？もう大丈夫なの？」

俺はニユイを見ながら言った。

「あ、ぐっすり眠れました。あつたかったです。」

いつまで俺は、ニユイの笑顔でドキッとするのはかなあ？

べ、別に好きなんかじゃないんだからね！

ごめん、キャラがかった。

「リヨウ！いるか！？」

あれ？アゼルがなんか言ってる。

「あ、いるけど？」

「私の武器素材を調達しにいくぞ！」

へ？

騒いでたつて言うからシリアス展開かと思った自分を返して。
いや、別にシリアスじゃないほうがいいけど。

「武器素材？」

なんか、とモノの合成思い出した。

「ついに、みつかったんだ！タイフーンが！」

タイフーンってどっかで聞いたことあるような？

2章 3・過去（後書き）

だーあ・・・ごめんなさい。なんか今回本当にめんどくさくなった

ww

次は完全に考えてあるんで ちゃんとしたものになります！すみません……

2章 4・素材

2章 4・素材

ごめん。タイフーンって何のゲームでできたか覚えてないや。

台風・・・いやなんでもないです。

「素材っていうとどんな感じの？」

自分はアゼルに向かって話す。

「タイフーンの牙。」

知るか、そんなの。

つーか、この世界の、牙とか尻尾とか素材ってドロップするんだよね。そのままとっちゃ駄目っぽかったよね。

「その確率ってどんなもんなの？」

「いや、絶対にドロップするようになってる。」

「ん？100パーなのか。」

なら別に・・・ってタイフーンってどんなやつよ。

「そいつ強い？」

「かなりな。」

「うええ、どんなやつさ？」

「えーと、なんか風を纏っているトカゲみたいなやつ。」
どこぞのクシャルだよ。

「な、なんとなくイメージできた。」

「で？どうしろと？」

「調達しにいくぞっていったんだからお前もいくの。」

「やだ。」

あんな弓矢をはじくようなやつ、だいつきらい。

「いや、お前のスキルアップとか、ランクアップとかもう、色々こみで、来い。」

「知らん。つーか自分は練習試合のあとだから、疲れてるんだけど。」

「ああ、そうだったな。まあ、いくのは明日だけだな。」

心の中で舌打ちした。言い逃れはできないみたいだ。

「ま・・・、いいけどな。」

実体のクシャルを見てみたいからな。

「よし、なら明日な。」

・・・やっぱ見たくないかも。

そういつて、アゼルはでていった。

「はあ・・・やだなあ・・・。」

この世界、危険が多すぎる。

ゲームの主人公とか大変だなあ。

「で？ニユイはいかないの？」

なんとなく聞いてみた。

「わかりません。私も今、聞いたので。」

「そうなのか。」

なんかニユイがいたほうが安心する気がする。

って、なんだそれ。そんな曖昧な照れ隠しみたいなことを考えてどうした？自分。

「どうしたんです？」

ニユイが、持っている本の隙間から顔をだしている。

「いや、なんでもない。」

そういつて、ごまかした。

「？ あ、そろそろ夕食ですよ？一緒に行きませんか？」

一緒についていう言葉に、どきつとしたのは、なぜ？

そんな純粹だったっけ？自分。

化合物どころか、混合物だと思ってたよ。認めてはいないけど。

「黒髪さん？」

「ん、ああ。」

あんまり、考えたこともなかったなあ、とか思いつつ、っていうか考える気になったことすらなかった。

ま、これからも考えなくていいや。
それで、いまだによくわからない広場への道をニユイに聞きながら行くのであった。

「本当にタイフーンなのか？」

ドラウンが、すぐく大臣。っぽい人と話している。

「うむ。風力が異常なほどに強くなっている地域があった。ちゃんとタイフーンの姿をみたものもいる。」

「ほう。」

「だが、本当にいくのか？相手はタイフーン。まだ実態もはっきりしていない。レアという点で8レベルだけで、強さもはっきりしていない。」

「まあ、姫の武器の素材だからな。仕方ない。」

「ふーむ。仕方ない・・・か。」

なんかおじさんとドラウンが話している。

「あの人だれ？」

大臣みたいな人を指さして、ニユイに聞いてみた。

「えっと、あの人はモンスター観察会副会長の方です。名前はちょっと忘れちゃいましたが・・・。」

「ああ、ぜんぜんいいよ。」

そんな偉そうな人もくるのか、この城は。

まあ、一応隊をもっているところでもあるからな。

そんなドラウン達を視界のすみにおきながら、あいている席に座り、自分達は果物を食べ始めた。

トリムのおいしさはいつでも変わらないなと思いつつ、無心におぼる。

「あ、黒髪さん。」

なんか聞き覚えのある、男の子の声がした。

「ん、え、あ、カーク君。」

口の中のトリムをのみこみながら言った。

シヨタ顔のカーク君は、なんか見るからにすっぱそうなものを食っていた。

カーク君は、魔女っ子アホっ子の件のあとから、少し自分の中の印象が変わってしまった。

まあ、シヨタなのは、変わらないが。

「ん・・・？僕の顔になんかついてますか？」

「いんや。なんにも。」

ちよつと見すぎたかな。

つて・・・あれ？

自分はシヨタコンじゃないよね？ちがうよねえ。

「あ、そういえば、黒髪さん。タイフーンの件って黒髪さんもいくんですか？」

「ん？ああ、いくらしいね。」

「あ、ならまた一緒にやれるんですね。」

ここの一緒について言葉には別に反応しなかったから、俺はシヨタコンじゃないことは確かになった。

「え？カークもいくの？」

なんか、ニユイの隣の席から女の子の声がした。
だれだか、わからな・・・。

「あー！」

ちよつと声を出してしまつて周りの目線がこっちに集まってしまった。

ごめんなさい、みなさん。そんな目でみないで。

自分がなぜ声を上げたかというと、その女の子があんなシンデレの子だったのだ。

「ん？クーイもいくんですか？」

この子クーイっていうのか。

「いや、いかないけど・・・。」

と、言って、クイーは立った。

「ちよつと姫様に言ってくる。私がカークなんかには負けるはずなんてないんだから！」

なぜ、いきなりそんな話になっただんだ！？

「え？ なっ、なにが？」

本人のカーク君もわかってないじゃないか。

「うるさいうるさいうるさい。私はカークには負けない！別に負けてるなんて思っていないんだから！」

うわ、なんかすごい・・・。どつかのシャナみたいな感じ。

「まあ・・・。望むところだけだね。」

カーク君もやる気なの！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6147n/>

ゲームストーリー

2011年2月14日00時25分発行